

V 研究活動－資料紹介・研究ノートなど－

1 近世新潟町長善寺跡出土の木製塔婆と骨蔵器

ここに取り上げる木製塔婆と骨蔵器は、中央区西堀通6番町に所在する長善寺跡から平成18(2006)年の試掘調査に際し出土した。盛土下に埋没した近世新潟町の墓の実態を示す重要な資料であり、以下では調査の概要と出土資料の特徴を述べたのち、木製塔婆が提起する問題を考える。

(1) 長善寺下層墓の概要(図1)

長善寺は、天文2(1533)年開創・元亀2(1571)年開山の浄土宗寺院で、明暦元(1655)年に西堀通に移転した後、平成4(1992)年に西区小新へ転出するまでの337年間にわたり同地に所在した。調査はビル建設に伴うもので、総面積251㎡を対象として平成18(2006)年7月24日から8月1日に実施した。

堆積層は、褐色砂層(I層)・褐色シルト(II層)・灰色シルト(III層)・暗茶色粘土(IV層)・青灰色砂層(V層)に大別できる。I～IV層は、転出時まで存在した近世～現代墓地の下に堆積する盛土層である。近世の墓は地表面下0.7～1.4mのII層と0.9～3.0mのIII層から出土した。

II層出土の墓は4基。いずれも陶製骨蔵器を伴う火葬墓である。本層およびIII層で墓石の存在は確認できなかった。III層出土の墓は20基。北東部と南西部に二つの集中域を形成し、南東部にも5基が点在する(図1右上)。形態別の内訳は、骨蔵器をもたない火葬墓2基、陶製骨蔵器を伴う火葬墓16基、土葬墓2基からなる。陶製骨蔵器を伴う火葬墓(図1右下)は、傍らに木製塔婆の基部が遺存していた(図2A)。火葬骨が単独で出土した墓は直径20cm前後を測り、埋納当初布袋などの柔軟な素材に覆われていた可能性が高い〔前山ほか1985〕。土葬墓は19世紀代の肥前大甕を使用する。後述のような骨蔵器に比べ年代が下降することから、明治6(1871)年から同8(1873)年にかけての「火葬禁止令」下に埋葬された表層部の墓とみられる。このほかIII層からは、木製塔婆や建築部材を井桁に組んだ整地遺構(図2B・C)と区画を意図した切石列(図2D)が中央部と北部から確認された。

(2) 木製塔婆

長善寺跡下層墓で確認された墓標は木製塔婆に限定される。これらは火葬墓の傍らに基部が直立して遺存するもの(図2A)と整地遺構の敷設材として利用したもの(図

2C)からなる。図2には、整地遺構から出土した9点を示す。樹種はいずれも針葉樹で、角柱材を使用する1類と板材を用いる2類に大別できる。

1類(図2-1～6)

「五輪塔形」をなし、上部に地輪(四角)・水輪(球)・火輪(屋根形)・風輪(半球)・空輪(宝珠)の区画をもつ。火葬墓の傍らに直立する角柱材は、本類の基部である。材の太さと木取りから、以下の三種に区分できる。

1a類(6) 樹齢90年以上の芯持材を使用する15cm角の太型塔婆で、球状の宝珠を載せる空風輪と均一な幅をもった火輪が遺存する。火輪の下端付近で腐朽が進み、風輪以下が欠損するが、幅3.6cm・長さ8.4cmの補修用ソケットを端部中央に設ける。火輪の正面を「火燈形」に彫りくぼめ、中央に「六世道誉上人」の文字が刻まれる。現存長は87.5cm。

1b類(1～4) 芯持材を使用する11～12cm角の中型塔婆である。5点出土し、全体形がうかがえる4点を示した。長さは概ね近似し、3.71mの1を最長、3.63mの4を最短とする。地輪・水輪・火輪の形状にも斉一性を認めるが、風輪と空輪(宝珠)に異なりがある。1は風輪の上端が弧を描き、宝珠の中央に稜をもつ。3・4の風輪は角柱状をなす。3の宝珠は基部の括れが小さく、先端が丸みを帯びる。4は基部から1.46m付近を境に遺存状態が異なる。上部が劣化することから地上部と埋設部がうかがえる資料で、前者の比率は60%である。先端部が腐朽する2は中央付近が被熱する。そのやや上部に5本の鉄釘が打ち込まれるが、意図は明らかでない。

1c類(5) 5cm角の割材を使用する細型塔婆で、本例に限定される。全長3.63mを測り、1b類と同様の長さをもつ。先端部の形状としては、水輪がやや縦長な点を除けば1b類と類似し、風輪が1、空輪が3に近似する。基部から1.55m以上で劣化が見られ、地上部の比率は57%と推定できる。

2類(図2-7～9)

いずれも破損した資料で、上半部1点と基部3点が出土した。本類は、木取りによって二分できる。

2a類(7) 柃目材を使用するものである。7は基部から下半部にかけての資料で、長さ101cm・最大幅8.4cm・最大厚2.3cmを測る。断面形は端正な長方形をなす。劣化が進むため図示しなかったが、このほか上半部が残る資料が1点ある。外形が1b類・1c類に類似する五輪塔形の塔婆である。



図1 長善寺跡下層墓の調査（網かけ区域は現存墓地）

2 b類（8・9）板目材を使用するものである。8・9の正面（8 a・9 a）は試掘調査直後の撮影写真で、「七回忌菩提」の墨書が見える。背面に凹凸があり、断面は不整形をなす。厚さはともに1.6cm。最大幅は8が8.8cm、9が9.7cmである。（前山精明）

(3) 骨蔵器

火葬墓に伴う骨蔵器が22点出土した。内訳は、肥前系陶器10点、越中瀬戸1点、産地不明陶器6点、土器5点となっており、肥前系陶器が全体の5割近くを占める。この中には蓋を伴うものが3点あった（図3）。

1～3はⅢ層出土の肥前系陶器。1は内面に刷毛目装飾を行う鉢で、17世紀末から18世紀代の製品と考えられる〔東中川2000〕。口縁部が打ち欠かれ、2の蓋として利用されていた。2・3はタタキ成形を行う甕である。外面に平行タタキ目、内面に格子目あて具が残る。タタキ成形を行ったのち、外面をナデ消し調整を行っている。外面上半に6条の沈線と鉤状突起を施し、口端には砂目が5か所残る。3は外面に格子目タタキ目、内面と内底にも格子目のあて具痕が残る。

4はⅡ層出土の肥前系陶器甕。内側に折りかえす口縁

が特徴の18世紀代の製品である。茶褐色の鉄釉がかかる。外面に格子目タタキ目、内面と内底にも格子目のあて具痕が残る。

5はⅢ層から出土した越中瀬戸の長胴壺である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りで切り離される。石英・長石を多量に含む粗い胎土で、内外面ともに鉄釉がかけられている。近世新潟町において越中瀬戸の製品は多く見られるが、骨蔵器として使用されるのはこの1点のみである。

6・7はⅡ層出土の素焼きの蓋と壺である。ともに石英・長石を多く含み、ロクロ成形される。7のプローションは、前述の越中瀬戸長胴壺によく似る。

8・9はⅢ層出土の産地不明陶器。口径14～15cm、器高12cm前後の小型甕である。ロクロ成形で、胎土には多量の石英や長石とともに磨耗岩石を多く含む。内外面に鉄釉が施されるが、口縁と底部に大量の石英・長石・砂が付着するのが特徴である。西区の大墓遺跡上層墓でも同様の骨蔵器が出土しており〔戸根ほか1973〕、在地系の陶器の可能性が高い。

相羽重徳氏の考察〔相羽2009〕によると、近世火葬墓



- A 骨蔵器と木製塔婆 I b 類の出土状況
 B 北から見た整地遺構上面の建築部材
 C 東から見た整地遺構下面の木製塔婆
 D 北から見た切石列

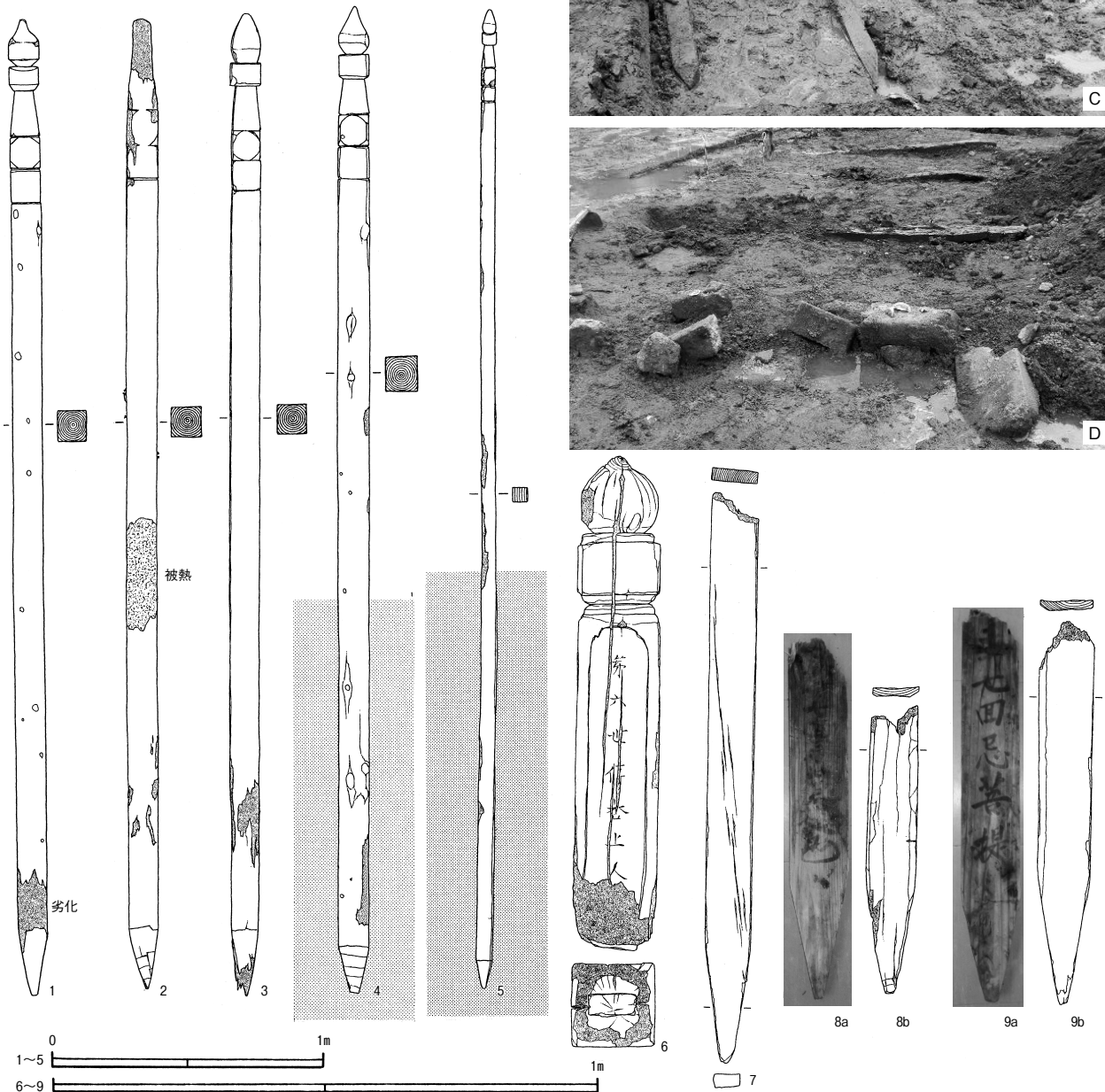


図2 長善寺跡Ⅲ層の遺構と木製塔婆

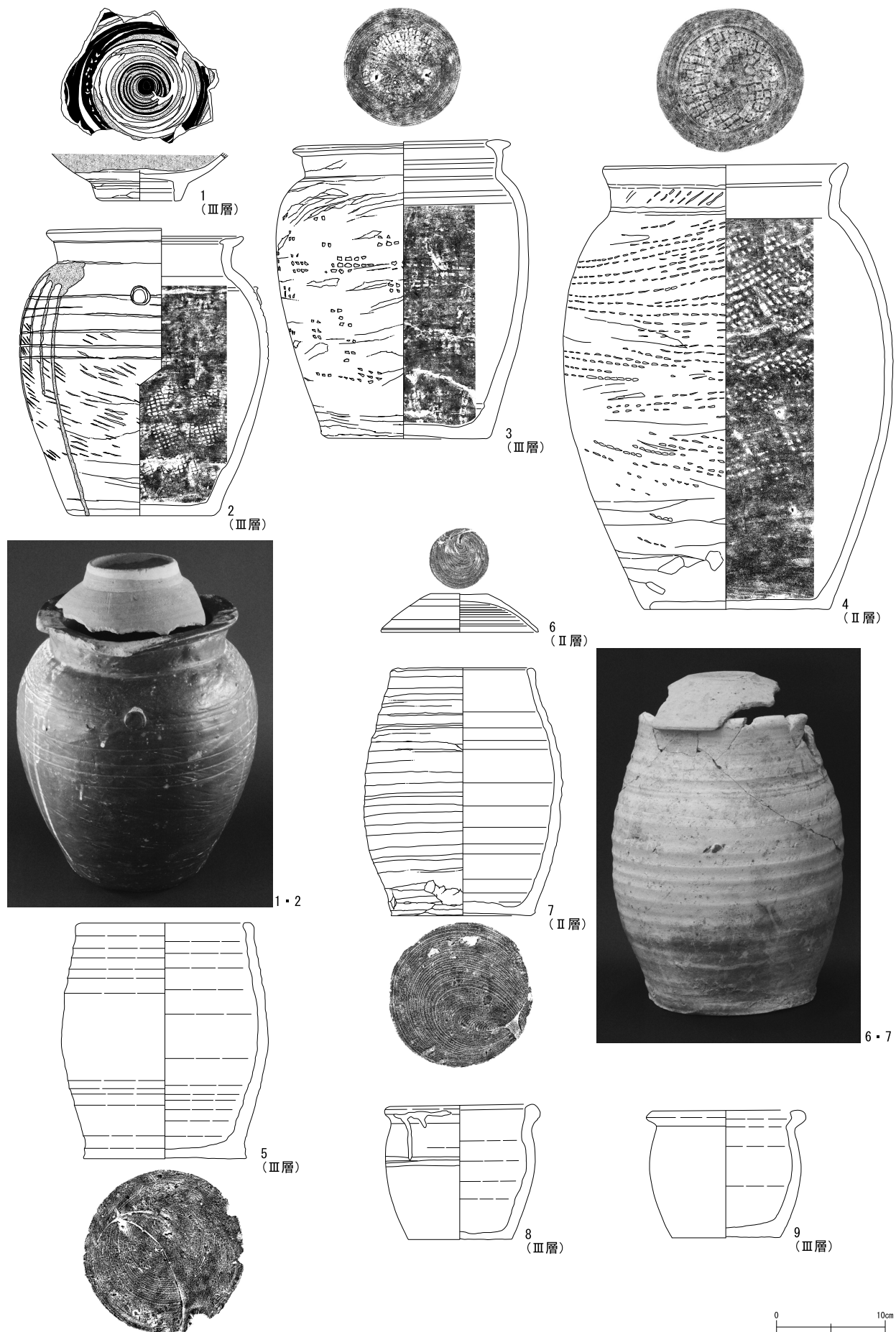
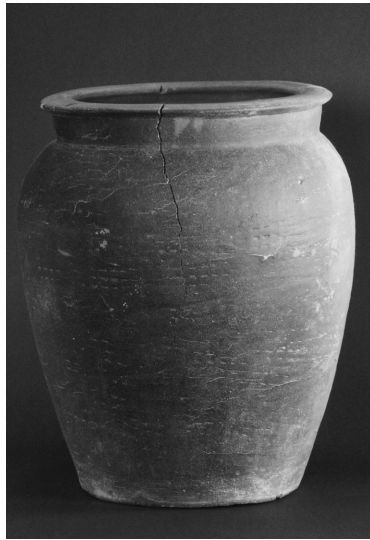


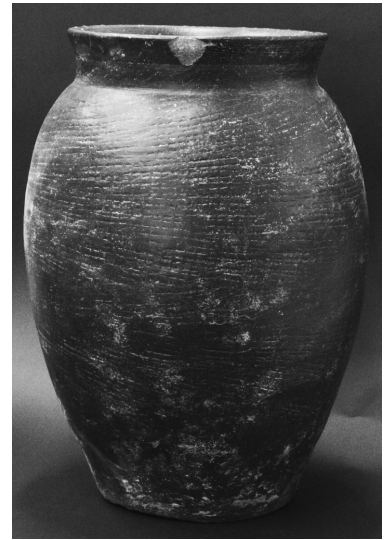
図3 骨蔵器実測図 (1/5)



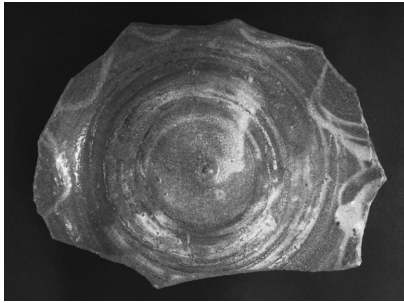
2



3



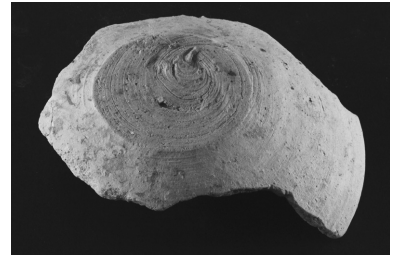
4



1 a



7



6



1 b



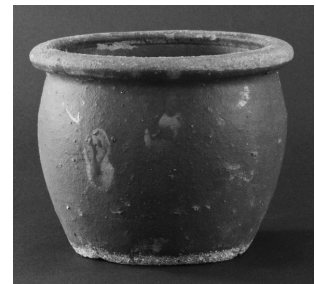
8



1 c



5

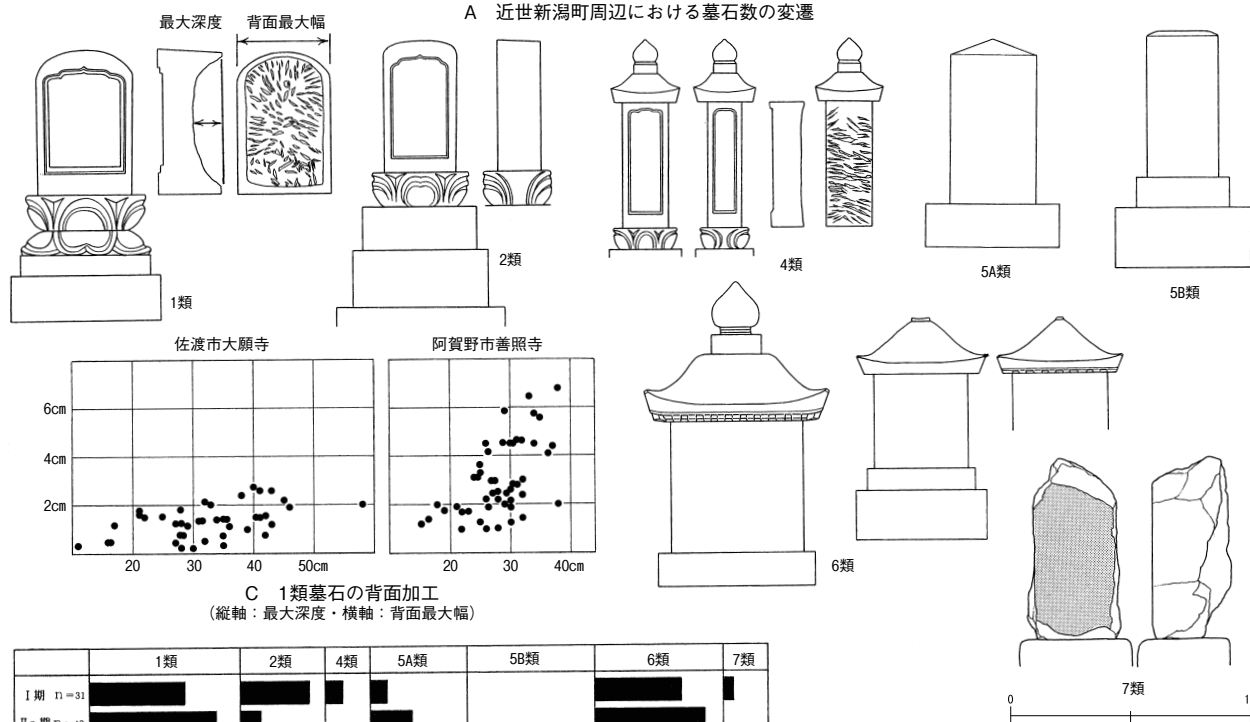
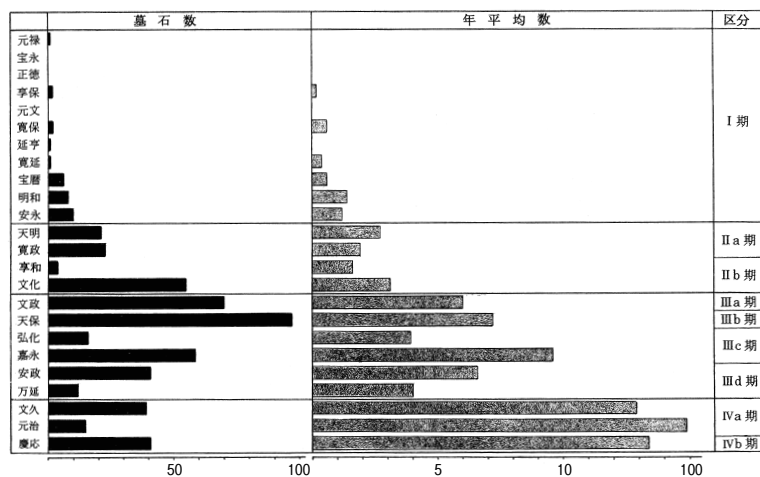


9

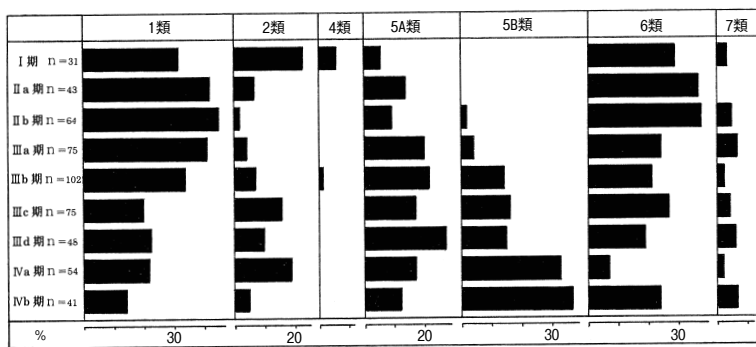
の骨蔵器の使用様相は大きく4期に区分される。Ⅰ期(16世紀後半～17世紀初頭)は骨蔵器を用いない葬法が主流を占める。Ⅱ期(17世紀前半～17世紀末)は肥前系の小型・中型甕を中心とし、少量ながらも越前・越中瀬戸などの骨蔵器を使用する。Ⅲ期(18世紀)は二時期に分けられる。Ⅲa期(18世紀前半)は、肥前系のハンズー甕を小型化した肥前系陶器甕が卓越する。Ⅲb期(18世紀後半)は骨蔵器専用容器と考えられる土師質土器が登場し、蓋も

転用品でなく専用品が使用される。Ⅳ期(19世紀後半)は瀬戸を中心とする磁器製合子が出現する。

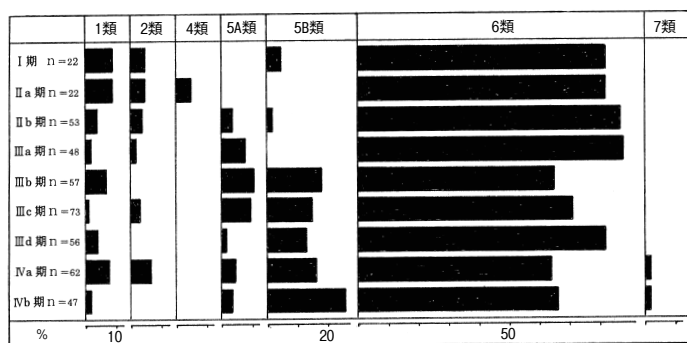
相羽氏の年代観と照らし合わせると、Ⅱ層には蓋付の土師質骨蔵器(6・7)が存在することから、Ⅲb期(18世紀後半)に比定できる。Ⅲ層では格子タタキ目の肥前系甕を主体とすることから、Ⅱ期(17世紀前半～17世紀末)と考えられる。ただし1の蓋は17世紀末から18世紀代に比定される肥前系陶器刷毛目鉢の転用品であることか



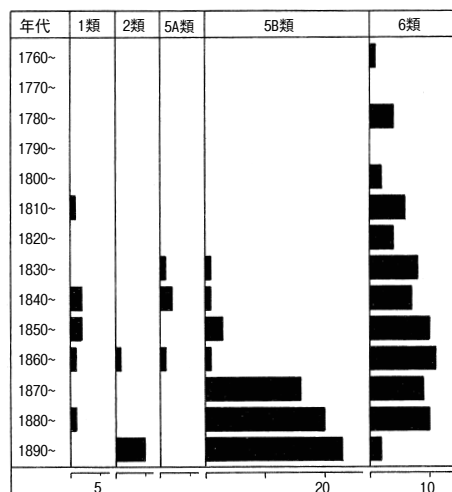
B 越後平野周辺の近世墓石



D 近世新潟町周辺における墓石形態の変遷



E 近世新潟町における墓石形態の変遷



F 新潟町の真宗寺院に見る墓石建立数の変遷

図4 越後平野周辺の墓石

ら、Ⅲ a 期まで下る可能性がある。

なお、肥前系陶器の年代については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）、越中瀬戸焼の年代観については鹿島昌也氏（富山市教育委員会）よりご教示いただいた。

（今井さやか）

（4）新潟町における墓標の変遷

越後平野の周辺でえられた近世墓の発掘調査と墓石調査の知見から、新潟町における墓標の変遷を考える。

前述のように、長善寺跡下層墓はⅡ層とⅢ層に形成されていた。Ⅱ層の年代は、骨蔵器のあり方から18世紀後半と推定できる。Ⅲ層の年代としては、木製塔婆Ⅰa類に記される「道誉上人」が寛文12（1672）年に逝去しているところから、当地への移転直後から墓地の形成が始まったことをうかがわせる。火葬骨が単独で出土した2基は大墓遺跡下層墓〔戸根ほか1973〕と坊ヶ入墳墓〔前山ほか1985〕に類例があり、前者は17世紀代、後者は17世紀～18世紀代と推定されている。本墓地の中では古様相をもつ形態であるが、一般階層の墓として18世紀代まで残存した可能性もある。Ⅲ層出土の骨蔵器は、17世紀代の肥前甕を主体とする。この中には18世紀代の肥前二彩鉢を蓋として利用する例があり、本層の下限資料となる。

Ⅲ層出土の木製塔婆は、太さや木取りにバラエティーが見られる。太い角柱材を用いる1a類は、長善寺六世住職の墓標もしくは供養塔である。中型～細型の角柱材を用いる1b・1c類は一般階層の墓標と考えられるが、細身の1c類は割材を用いる点でも格差がある。2類は年忌供養に伴う簡易塔婆である。本類も柁目材を用いた厚手の2a類と断面が不整形な板目材の2b類に二分でき、埋葬者の階層が多岐にわたることを物語る。

ところで、越後平野の周辺では、18世紀中ごろから墓石の建立が一般化する。17世紀～18世紀前半と推定される長善寺跡Ⅲ層出土の木製塔婆は、墓石出現以前の墓標の実態を示す貴重な資料となる。以下では、墓石の変遷を概観する中で木製塔婆から墓石への移行過程を検討する。西区小新に移転した現在の長善寺では墓地整理に伴い近世の墓石が著しく減少しているため、近世新潟町と周辺地域における主要な墓石形態を図4B、その変遷を同図D・Eに示した。時期区分は、新潟町周辺地域での墓石数の推移（図4A）に基づく。

越後平野周辺の近世墓石は、使用石材で新旧二時期に大別できる。19世紀前半まで多用される石材は、佐渡南部に産出する真珠岩質デイスイト（真野石）である。この時期の墓石の多くは佐渡から供給されたもので、1類（背面にタガネ成形痕をとどめる櫛型碑）の背面には軽量化を意図して入念な抉り加工が行われる（図4C）。墓石形態を

見ると、新潟町の周辺では天保年間まで1類、万延年間前後に5A類（頂部が尖る角柱塔）が高率を示す（図4D）。これに対し新潟町では1類や5A類が総じて少なく、堅牢な作りの6類（堂塔墓）が卓越する（図4E）。

19世紀半ばになると、使用石材は長岡市域に産出する安山岩（釜沢石）に変化し、越後の墓石製作は活発化する。新潟町の周辺では、文久年間以後主要形態が5B類（頂部が平坦な角柱塔）に変わり、現代に連なる墓石様相へと移行する。しかし、新潟町では引き続き6類が卓越し、5B類の増加は周辺地域ほどみられない。

新潟町の墓石に転機が訪れるのは、5B類が急激に増加する明治初期（1870年代）である（図4F）。それらの多くは追葬を意図した「代々墓」である点に特徴がある。長善寺跡下層墓の骨蔵器は、個人埋葬用の小型～中型甕や壺を使用する。19世紀代前半までに建立された墓石の多くも戒名が刻まれた個人墓であり、合葬墓への移行は新潟町における墓制上の大きな画期とみなされる。

近世新潟町の墓石に認める周辺地域との異なりは、1類・5類の乏しさと6類の卓越に求められる。前者は一般階層、後者は富裕層の墓にあたる。近世新潟町で前者が乏しい現象については、墓石1類や5類に代わる墓標として木製塔婆が幕末まで残存する可能性を別稿で指摘した〔前山2018・2019〕。こうした見方に従えば、明治初期の新潟町での5B類の急増は、恒久的な墓の建立にあたって生じた石への材質転換を意味することになる。長善寺跡下層墓から出土した17世紀～18世紀前半の木製塔婆は、新潟町における墓地景観の変遷を考える上でも示唆に富んだ資料として重要である。（前山精明）

引用・参考文献

- 相羽重徳 2009 「新潟県における近世骨蔵器の様相」『新潟県の考古学』Ⅱ 新潟県考古学会
- 戸根与八郎ほか 1973 『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 西蒲原郡黒埼町大墓遺跡調査報告』新潟県教育委員会
- 新潟市教育委員会 1980 『新潟市文化財調査報告書 寺院Ⅰ』新潟市
- 東中川忠美 2000 「陶器の編年 壺・甕」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 前山精明ほか 1985 『城願寺跡・坊ヶ入墳墓』巻町教育委員会
- 前山精明 2018 「周辺地域からみた近世新潟町の墓」『墓石から近世新潟町の歴史を探るプロジェクト』みなと新潟実行委員会
- 前山精明 2019 「越後平野周辺における墓石出現・普及期の墓－近世墓の発掘調査と墓石調査から－」『磨斧作針－橋本博文先生退職記念論集－』六一書房